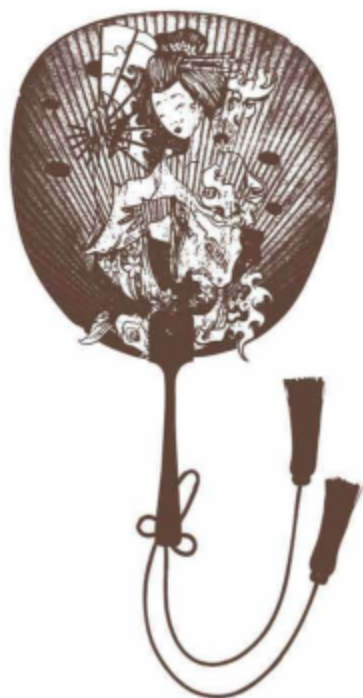


女が語る

中国の人と心

王敏
著



女が語る

中国の人と心

王敏
著

梅
櫻
叢
書



图书在版编目 (CIP) 数据

历史上的中国女性：日文 / 王敏著. — 北京：

朝华出版社，2015.12

(梅樱书系)

ISBN 978-7-5054-3462-2

I. ①历… II. ①王… III. ①女性—人物—生平事迹—中国—日文 IV. ①K828.5

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2015) 第 309297 号

女が語る中国の人と心 (历史上的中国女性)

作 者 王 敏

责任编辑 焦雅楠

特约编辑 杨 莉

责任印制 陆竞赢

封面设计 仙境设计

制 作 北京维诺传媒文化有限公司

出版发行 朝华出版社

社 址 北京市西城区百万庄大街 24 号 邮政编码 100037

订购电话 (010) 68413840 68996050

传 真 (010) 88415258 (发行部)

网 址 <http://zhcb.cipg.org.cn>

印 刷 虎彩印艺股份有限公司

经 销 全国新华书店

开 本 787mm × 1092mm 1/32 字 数 85 千字

印 张 4.5

版 次 2016 年 1 月第 1 版 2016 年 1 月第 1 次印刷

装 别 平

书 号 ISBN 978-7-5054-3462-2

定 价 18.00 元

版权所有 翻印必究 · 印装有误 负责调换

2016年1月 初版発行

女が語る中国の人と心

©2016 中国 北京 朝華出版社有限責任公司

朝華出版社有限責任公司出版

中国北京百万莊大街 24 号

〒 100037

電話番号：0086-10-68996050

FAX:0086-10-88415258

<http://zhcb.cipg.org.cn>

中華人民共和国にて印刷

「元始も今も、女性は太陽である」

その球体は、炎の固まりだった。遥かな地平線に忽然と現れて、漆黑と厳寒を払い、人びとに希望と暖かさをもたらした。すべての蘇生を促すこの球体を、人びとは崇拜し始めたのである……。

太陽信仰は原始・古代に端を発し、多くの民族に共通するものだ。

中国では伝説上の皇帝・伏羲^{ふつき}は太陽神であり、妹とされる女媧^{じょか}は月の神といわれた。この兄妹二神は有能ぶりを発揮して、中国の創世神話のヒーロー、ヒロインとして言い伝えられてきた。ここで太陽は男性扱いされているが、民話では太陽ははにかみ屋の女性とされている。地上に顔を出さなければならなくなった時、人間に見られるのが恥ずかしい。そこで、顔の周りに無数の針をつけた。私たちも小さいころ、太陽を赤く丸く塗り、放射状の光を針のように線書きしたものだ。

中国の少数民族で、太陽を女性ととらえるのは西南地方を中心に南方に多い。衣食住が比較的豊かな温暖

多湿な気候が反映しているからだろう。反対に、砂漠の多い北方の少数民族は太陽を男性と認識する傾向にある。

私が育った西安も北方にある。そこに伝わる、かわいらしい「ヒマワリっ子」の話を紹介しよう――。

太陽が消えた大昔、暗闇に苦しむ人びとを救うべく、若者は太陽を探し出そうと旅に出ることにした。この兄と仲のよい妹は見送るために山を一つ越え二つ越え、兄についていった。やがて一番高い山まで来て、妹は「絶対に帰ってきてね」と手を振り見送った。

兄の手柄だろう、刻々と東の空が明るくなっていく。妹は東に向かって手を振り、兄を励まし続けた。ついに太陽が再び昇り始めた。妹は「兄さんだ。兄さんが昇っていく」と歓喜した。その瞬間、妹の足元は根つき、太陽の兄を見続けて涙を流す顔は黄色の大きなヒマワリの花に変わっていった……。

太陽が兄の化身のようだが、限りない慈愛が伝わってくる話である。兄妹愛が描かれながら、同時に心から暖まる太陽の光を感じてしまう。北方的な優しい太陽の印象だ。日本に来て、私は容赦なく照りつける、ギラつく太陽のイメージは消えた。太陽を優しい存在と思うようになった。

『記紀』に描かれる太陽神のあまてらすおのみかみ天照大神は優しい。弟すさのおのみことの須佐之男命の乱暴を説得するのをあきらめて、岩穴に隠れるぐらいだから、包容力もあり、忍耐力もあり、日本女性の大人しさをきわめて象徴する逸話だ。

いま、太陽信仰は薄らいでしまった。だが、太陽は東の地平線に燦然と昇り、飢えと寒さを消し、生命の息を吹きこむ責任を休みなく果たしている。

横浜市在住の画家・中島由夫さんは、母親が生活する故郷、埼玉県川本町の老人ホームに燃える「太陽」の絵を贈ったという。『朝日新聞』（1998年2月25日付）によると中島さんは「北欧の太陽の画家」といわれ、スウェーデンと横浜を半年ごとに往復。北欧では冬の日照時間は短く、太陽への憧れが強い。だから、「離れていると太陽が母親の顔に見える」。ホームの食堂に掛けられた絵には、中島さんの思いである「すべての地上の母に捧ぐ」という言葉がプレートに刻まれているという。

太陽が活力の源であることを教えてくれるニュースだと私は思った。

中国で毛沢東は若者を「朝の太陽」にたとえた。「朝」には「幼い、未熟な」のほかに、「若い、生き生き」というような意味がある。毛沢東は、明け方をしばらく過ぎた午前八時から九時ごろの太陽のもつエネルギーを、未来を担う若者とダブらせた。若者の純粹さ、未来への可能性の大きさ、冒険を恐れぬパワーを讃えたのである。「朝」はもうひとつ、「かわいらしい」という意味の接頭語でもあり、以来、「朝の太陽」は青少年の代名詞になった。

太陽の無限のエネルギーは古来、人間にとって神秘そのものだ。生命を生み、育む。女性にたとえてきた

のもうなずける。とくに母系制の原始・古代では、太陽は女神であったに違いない。

さあ、太陽の輝きを取り戻そうではないか——。19世紀の画家ゴッホは太陽に憧れたではないか。第3章で書いたように、中国の唐の名詩人・孟郊は、母を「三春暉」と称えたではないか。

日本女性は勤勉である。その理想に良妻賢母を求めてきた伝統習慣がある。包容力、忍耐力、協調性を受け継いできた。そして何よりもいま、自己錬磨をする時間のゆとりがある。自己を磨く目標こそ大切にしたい。みずから輝きを出す太陽こそ、目標であってほしいのである。

平塚らいてうの「元始、女性は太陽であった」を改めて、「元始も今も、女性は太陽である」と言い換えようではないか。

私は女性問題の専門家ではない。自分の限界を感じながら、やっとまとめに到達できた。日本と中国の両方の国に住み、カルチャーショックを経験したことが、本書を書く動機になった。日本人は中国文化を受容しながらも、われわれとは異質の生き方の目標をもっていると知ったからだ。生活観や家庭観、恋愛観、女性観の違いの大きさに驚かされたからでもある。そこでどこからその違いがくるのか、少しでも私なりに突きとめてみたかった。

しかし、「まとめた」というにはほど遠い内容のまま筆をおかざるをえない。知識不足や確認する時間が

不足して、さじを投げたところも多いからだ。それでも発表する気になったのは、愛する日本女性の自己改革の参考になるかも知れないと思ったからだ。あとは、大方のご批判とご指導をいただき、それこそ自己錬磨の指針にさせていただこうと思う。

この拙^{つたな}い著作を中日両国の女性と男性に捧げたい。太陽がいくら輝いても、曇りや雨の日には見えない。「太陽」を抱擁する「青空」がなくてはならない。太陽の輝きは、美しく映る青空とつねに一体なのだ。拙著にお付き合いいただいた読者のお一人おひとりに、心からお礼申します。

特に汪涛社長と焦雅楠編集主任及び人民中国雑誌社賈秋雅社長補佐に深く感謝申します。

著者



目次



はじめに	
餃子誕生の淵源となった女神の女媧	1
自死を選んだ桃花夫人	3
楚の霸王・項羽の寵姫、虞美人	5
酒屋の女将から貴婦人に変身した卓文君	9
政略結婚を「平和利用」にした王昭君	11
「秋の扇」と班婕妤	15
3回結婚した詩人の蔡琰	19
「鴛鴦」の由来を残した劉蘭之	23
回文詩「璇璣図」の作者蘇蕙	27
漢詩の歌姫の子夜	31
中国唯一の女帝の則天武后	35
牡丹の香りの女王、楊貴妃	39
情愛と惜別の名詩を残した崔鶯鶯	43
奔放な詩人の薛涛	47
多情に生きた魚玄機	51
「国亡詩」と花蕊夫人	55
漂泊の詞人、李清照	59





目次



悲恋で悶死した唐琬	63
[不貞の婦] 朱淑真とは	67
宋王朝悲運の王妃、王清恵	71
童女の心を失わなかった才女の張玉娘	75
契丹族の才女、蕭観音	79
詩で帝を諫めた才女、蕭瑟瑟	83
竹画に精華を放つ管道昇	87
「元」滅ぶとも愛は滅びず阿湔公主	91
攻撃から村を救った詩を書いた老女、郭貞順	95
留守を守った才女の沈宜修	99
猛将・呉三桂に愛された陳円円	103
伴侶を選んだ逞しい芸妓、柳如是	107
明・洪武帝の「あげまん」の馬皇后	111
権勢と女性美を極めた西太后	115
独学で漢方を習得し女性の自覚を説いた曾懿	119
中国を目覚めさせた近代女性革命家、秋瑾	123



餃子誕生の 淵源となった女神の女媧

生年不祥。宇宙創生と共に誕生の女神とされ、人類を造ったという伝承を始め、天の補修もしたものの作りの名人。最初の王朝・殷の紂王が廟に祭られた彼女の像に一目ぼれ、壁にその美貌を称える詩を書き残した。紂王は色に溺れた悪玉としてその名を残したが、金毛九尾の狐の乗り移った美女に惑い、殷王朝の滅亡を招いた。その美女は女媧じょがが仕向けたとされる。この話は『封神演義』に語られている。

昔、一人の女神が寂しさに耐えていた。その名を女媧じょがと聞いた。人間はまだ生まれていない。女媧は思い立った。この世界に、人間を創作する偉業を始めたのである。

周りにはふんだんに黄土がある。きめこまかい独特の黄土は大黄河の水をかければやわらかく、細工し易い。ものの作りの名人の異名の女媧であったが、神々に手伝ってもらって、器用に黄色い肌の泥人形が仕上がった。ところが、寒い季節であった。冬至の日に、命の息吹を吹きかけようとした時、大切な耳が凍えて落ちてしまった。女媧はあわてて、糸を使って落ちた耳

を結わえて付けなおした……。

さて、人間の耳は母親のお腹の中にいる時から働きだし、生まれた後はもっとも遅くまで機能しているという。これは、女媧の最後の手直しのお陰というべきか。しかし、耳の喪失を恐れて、古代から祭祀の中心に耳の形をした供物を捧げてきた。餃子の誕生のいわれである。耳の形をしたこの食べ物をたくさん食べるほど、耳は元気になるという信仰である。中国では冬至に餃子を食べるのが今も習慣になつている。そして、なるべく多く食べれるように工夫してきた。それは脂濃くない水餃子だった。

耳を大切に扱う気持ちが守り用のイヤリングを生んだという。装飾の走りもまた、女媧への感謝に始まる訳で、女媧は『女が語る中国の人と心』のトップにふさわしい。

中国の創生神話で神々の多くは男性だ。はっきり女性と認められるのは、案外この女媧だけかも知れない。ところが、その姿は蛇身人首という。大詩人屈原（前339～278？）が不公平だと思ったか、「楚辞・天問」で問いかけている。「だれがその不思議な姿を定め工夫したのか」と。夫とも兄ともいわれる、重要な神の伏羲も同じ姿だった。中国で蛇は吉祥シンボルであり、聖なる水の守り神とされて、崇められてきたことを思えば、女媧は巳（蛇）年にふさわしい女神なのである。

自死を選んだ桃花夫人

春秋時代、現在の河南省にあたる「息」の王息侯は「陳」の国から公女「嬀」を妃に迎えた。「息嬀」となった公女が美しく、「桃花夫人」と称され、伝説上の貞節のシンボルでもある。

紀元前の春秋時代、現在の河南省にあった「息」と「蔡」は隣り合う国であった。互いに穀倉地を擁し、張り合っていた。息侯は「陳」の国から公女「嬀」を妃に迎えることにした。その名が周辺の国々に広く知れ渡る絶世の美人であった。蔡の哀侯もすでに陳の公女と結婚していたが、息侯の結婚相手の名を耳にして羨ましくなった。嫁入りで折りよく蔡の地を通過することになり、嬀を一目見たい哀侯は引きとめようとして無礼な印象を残した。息侯は嬀を迎え、晴れて妃にしたが、哀侯の非礼が許せないと思った。怒りが収まらず、息侯は強国の「楚」をけしかけることに成功、蔡国を攻めさせた。

敗れて、哀侯は抑留されて復讐したいと思い、楚の文王に、ことあるごとに嬀妃がどんなに美しいか、心を揺さぶった。乗せられた文王は息国に攻め入り、息侯を殺し、嬀妃を楚へ連れ帰った。聞かされていた以

上に、桃のように美しい肌の美女であった。しかし、国を支配できても、嬀妃を従わせることは無理であった。口も聞かず、ついには自らの命を絶ち、文王への答えとした。嬀妃は殺される息王に「私はいつまでもあなたのことを慕い、今死に別れても、あの世で会いましょう」と言い誓ったという。

後世の詩人たちはこの悲話を見逃さない。唐代の杜^と牧^{ぼく}は「桃花夫人廟^{びょう}に題す」を詠んだ。

細腰宮裏露桃新たなり 脈脈言なく幾春を^{わた}度る……

すらりとした細腰は美人の形容として欠かせない。楚の王宮の庭に、嬀をしのばせる桃の花がその後も咲き続けたといい、李白も「聖夫石」で、劉長卿も「桃花夫人廟を過る」で同様に称えている。その廟は嬀妃が逝ったゆかりの湖北省漢陽県に建てられている。

楚の文王は息侯を殺したことを嬀に「もとはといえ、蔡の哀侯にそそのかされたからだ」とわびて、抑留の哀侯も殺してしまった。嬀が貞淑な妃という伝承とは反対の見方もある。文王との間に二人も子をもうけたとされているからで、相容れない見方があるのは歴史像の面白みというべきか。

楚の霸王・項羽の寵姫、虞美人

中国の最初の統一王朝・秦はわずか15年で滅びる。秦後の制覇をかけ、楚の項羽と漢の劉邦が争うこと5年。項羽が一時は優位に立ち「霸王」と名乗ったが、垓下がいかの戦いで敗れる。劉邦を祖とする長い漢の時代を迎える。項羽に愛されたのが虞美人ぐびじん。命まで捧げて尽くした麗人であった。

ヒナゲシは初夏の5月、野山に咲く。花びらは4枚。紅色が多いが、花壇用として白やピンクもある。別名の「虞美人草ぐびじんそう」の方がよく知られているかもしれない。

この名は『史記』に由来するらしい。楚の項羽は劉邦とともに、秦の圧政に反旗を翻して決起し、最後は雌雄を決する戦いをした。両雄並び立たずという通り、項羽が、今の安徽省靈璧県の「垓下がいかの戦い」で敗れる。楚軍は兵少なく食糧尽きて夜になった時、四方八方から歌声が聞こえた。懐かしい楚の歌である。この「四面楚歌」に、項羽の陣営は、劉邦が楚を攻め取ったのかと、戦意を失った。この時、項羽のそばにいたのが寵姫の「虞美人」である。影のようにつかえ、項羽の



愛を受けてきた。

力、山を抜き、氣、世を蓋^{おお}う時、利あらず、驢^{すい}、逝^いかず。
驢^い、逝^かず、奈何^{いかに}すべき
虞^いや、虞^{かん}や、奈何^{いかに}せん。

驢とは項羽の愛馬である。項羽は虞を大いに哀れんでこの歌を反復したという。これに、虞美人も歌で答え、自ら舞った。

漢兵^す已に地を略す
四方楚歌の聲
大王意氣尽きぬ
賤妾^{せんしょう}何ぞ生^{やすん}に聊^いぜん

虞美人はこう歌って、項羽の剣で自害した。その夜、項羽は包圍をいったん脱出した後、漢軍に突入して勇ましい死を遂げたという。虞美人の亡くなった後、その初夏に鮮血を思わせる花が咲いた。それがヒナゲシである。

宋代に沈括が「虞美人曲」で、19世紀の清代にも華秋萍^かが琵琶の名曲「十面埋伏」で、虞美人をしのんだ。しかし、ヒナゲシは西アジア原産の花である。虞美人の悲しい史実に心痛めたはるか後世の人の思いが、ヒナゲシを虞美人の生まれ変わりに仕立てたというのが本当らしい。

虞美人草のほかに、中国では「舞草」の別名もある。人が近づいたり、そばで歌ったりすると、舞うように